研究ノート

北海道立図書館所蔵の『アイヌ画譜』について

東　俊佑

キーワード　蝦夷島奇観（Ezogashima Kikan）、秦檍丸・檍麿（HATA Awakimaru, Awakimaro）、村上島之允（MURAKAMI Shimanojo）、アイヌ絵（Ainu-e）、アイヌ風俗画（Ainu Genre Painting）

一　はじめに

本稿は、北海道立図書館所蔵の資料『アイヌ画譜』(1)の分析により、秦檍丸（村上島之允）『蝦夷島奇観』(2)写本の一端を考察するものである。延いては、北海道博物館所蔵『蝦夷島奇観』写本(3)の資料的価値への寄与を目的に著すものでもある。

一七九九（寛政十一）年に成立した檍丸の蝦夷地紀行画集は、幾度の増補改訂を重ね、秦檍麿自筆『蝦夷島奇観』（国指定重要文化財、東京国立博物館所蔵、以下「東博本」と称す）として完成したとされる（谷澤・佐々木一九八二：二三〇）。その一方で、数多くの『蝦夷島奇観』などと称する写本が存在する。その数は少なくとも六五以上に及ぶと想定される(4)。本稿で分析する『アイヌ画譜』も、そのなかの一つに位置付けることのできるものである。

『アイヌ画譜』は現在、折本に仕立てられた状態で上巻及び下巻の二帖として北海道立図書館に登録されている。外観は両帖とも同様の表紙・裏表紙による装幀である（二～三頁写真参照）。法量（外形）は上巻が縦二六・八×横二〇・五cm、下巻が縦二六・六×横一九・五cmであり、横幅は上巻の方が若干長い。また、両帖とも表紙中央上部に題箋（絹地）の貼付があるものの文字の記載はない。なお、表紙右上貼付のラベルは所蔵館の蔵書ラベルである。

内容については、次章以下で詳しく検討するとおり、上巻が東博本の「六　熊祭部」、下巻は東博本の「十二　唐太部」とよく似た構成であり、それらの関連資料と評価できるものである。

本稿では以下、「二」で各場面の絵と詞書について、『アイヌ画譜』と東博本を比較する形で示し、「三」で各場面ごとに考察を行い、最後に「四」で総合考察を行う。

二　絵と詞書

［表1］（次頁）は『アイヌ画譜』二帖の構成・内容を整理したものである。上巻は東博本「六　熊祭部」掲載の五場面、下巻は東博本「十二　唐太部」掲載の八場面（最初の目録を含む、絵・詞書としては七場面）から構成される。本稿では各場面に「上1」（上巻の第一場面の略）などと整理番号を便宜上付し、画題も示した。画題は、料紙に記載の名称を採用したが、名称不記載のものは東博本の名称などを参考に、筆者が便宜上付した。〔　〕内は筆者による註であることを示している。

以下、各場面ごとに資料の写真（絵・詞書）と詞書の釈文を示した。比較のために、東博本の写真と詞書の釈文も示した。東博本釈文の赤字は、『アイヌ画譜』釈文との相違部分を示すものである。なお、釈文中の〔　〕は筆者による註である。東博本の釈文掲載、及び釈文中の註の挿入にあたっては、谷澤尚一・佐々木利和編『秦檍麿自筆　蝦夷島奇観』（谷澤・佐々木　一九八二）な

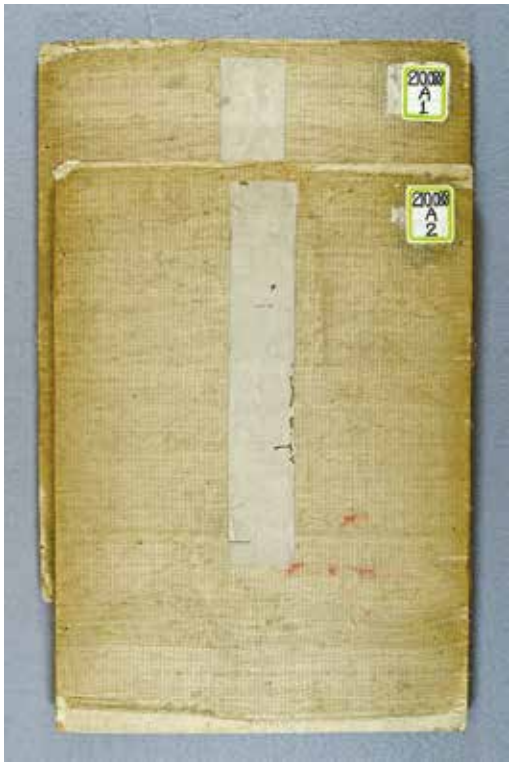
東　俊佑：北海道博物館　研究部　歴史研究グループ

どを参照した。

詞書の翻刻にあたっては、旧漢字や異体字などはできるだけそのまま示したが、一部似た字で代用した箇所がある。行立ては資料どおりとした。

掲載写真については、本稿での分析に支障のない範囲で明るさの調整、色補正、解像度調整、変形処理、トリミングなどを行った補正画像であることをお断りしておく。また、レイアウトの都合上、同じ資料、同じ場面であっても適宜縮小して写真を提示したものもある。

なお、『アイヌ画譜』、東博本のほかに、参考として北海道立図書館所蔵『蝦夷島奇観』（以下、「道図本」と称す）や北海道博物館所蔵本(5)（以下「北博本A」、「北博本B」と称す）該当場面の写真も適宜示した。



『アイヌ画譜』外観
表紙右上の蔵書ラベル「210.088／A／1」とあるのが上巻、「210.088／A／2」が下巻である。

表1　『アイヌ画譜』の構成

アイヌ画譜						東博本		
構成		場面番号と画題			料紙の法量	掲載箇所と画題		
		番号	料紙上の画題	目録上の画題		巻	料紙上の画題	目録上の画題
上巻								
1オ	見返				26.8×40.6cm			
2オ	1ウ	上1	〔熊祭踊図〕	－（目録なし）	26.8×40.6cm	六　熊祭部	〔熊祭踊図〕	－
3オ	2ウ	上2	〔熊祭花矢射図〕	－（目録なし）	26.8×40.6cm	六　熊祭部	〔熊祭花矢射図〕	－
4オ	3ウ	上3	〔熊祭挟殺図〕	－（目録なし）	26.8×40.6cm	六　熊祭部	〔熊祭挟殺図〕	－
5オ	4ウ	上4	〔熊祭神酒飲図〕	－（目録なし）	26.8×40.6cm	六　熊祭部	〔熊祭神酒飲図〕	－
6オ	5ウ	上5	〔熊祭酒宴図〕	－（目録なし）	26.8×40.6cm	六　熊祭部	〔熊祭酒宴図〕	－
裏見返	6ウ				26.8×40.6cm			
下巻								
1オ	見返				26.7×38.8cm			
2オ	1ウ	下1	唐太部〔唐太部目録〕	－	26.7×38.1cm	十二　唐太部	〔唐太部目録〕	
3オ	2ウ	下2	〔唐太島夷図〕	唐太島夷図	26.7×38.2cm	十二　唐太部	〔唐太島夷図〕	唐太島夷図
4オ	3ウ	下3	シラヌシ地図	シラヌシ地図	26.7×38.7cm	十二　唐太部	シラヌシ地図	シラヌシ地図
5オ	4ウ	下4	使犬引舟図	使犬引舟引図	26.7×38.5cm	十二　唐太部	使犬引舟図	使犬引舟引図
6オ	5ウ	下5	〔判官岬図〕	判官岬図	26.7×38.4cm	十二　唐太部	〔判官岬図〕	判官岬図
7オ	6ウ	下6	唐人（カラフト）島酋長墓	男夷墓図 ※目録の順番では「カラフト椀図」	26.7×38.2cm	十二　唐太部	唐人（カラフト）島酋長墓	男夷墓
8オ	7ウ	下7	カラフト椀（イタンキ）	カラフト椀図 ※目録の順番では「男夷墓図」	26.7×38.7cm	十二　唐太部	カラフト椀（イタンキ）	カラフト椀図
9オ	8ウ	下8	カラフト女夷墓	女夷墓図	26.7×38.3cm	十二　唐太部	カラフト女夷墓	女夷墓
裏見返	9ウ				26.7×38.8cm			

アイヌ画譜　下（表紙）　　アイヌ画譜　上（表紙）

【アイヌ画譜　下】

1オ　　見返

裏見返　　9ウ

【アイヌ画譜　上】

1オ　　見返

裏見返　　6ウ

上1　〔熊祭踊図〕

【道図本釈文】
※アイヌ画譜に同じ

参考　道図本　〔熊祭踊図〕

参考　北博本B　〔熊祭踊図〕

参考　北博本A　〔熊祭踊図〕

【釈文】

イヨマンテ（一日イヨヲマンテ）是夷地の大祭事
にして、熊を殺し神に祀る、初春より
深山の積雪を分て、飼馴たる犬に熊の
蟄したるをさくらしめ、獲る子を
取れは家婦にあたへ、乳味をもつて
育る、生質により荒きハ籠に入置も
あり、食は魚肉を飼ふ、冬十月頃に
至れは長して大熊となる、
日をトして酒食を
製し、親族深友を
あつむる、是を賓人造（マラフトカル）
と云、其日の朝熊に食事
さま〳〵喰セ、神ハ今日
ヲマンテセり、よく〳〵餌喰（エヘ）し
給へと祝言し、集夷籠を
めくり躍（リムセ）をす、削りかけの
弊木（イナヲ）を製し、如垣に
ならへ、前に文蓙（アヤキナ）を敷、
扨熊を籠より出すハ、
家婦のなす事古例なり、

【東博本釈文】

イヨマンテ（一日イヨヲマンテ）是夷地の大祭
事にして、熊を殺し神に**祭**る也、
初春**の頃**より深山の積雪を分て、
飼馴たる犬**おして**熊の**蟄**し
たるを**探**らし**む**、子を**捕獲て**
家婦に**授**、乳味を**以**て**是を**
育**しむ**、生質により**て**荒きハ
籠に入置もあり、食は
魚肉を**與て是を養**、
冬十月頃に至れは
長して大熊となる、日を
トして酒食を**設**、親族**朋**友
を**集**む、是を賓人造（マラフトカル）と云、
其朝熊に食事さま〳〵
喰セ、神**は**今日ヲマンテ
セり、よく〳〵餌喰（エヘ）し
給へと**説**言し、集夷
籠をめくり躍（リムセ）をす、
削りかけの**幣**木（イナヲ）を
製し、如垣にならへ
前に文**席**（アヤキナ）を敷**き**、
扨熊を**籠**より
出す**は**、家婦のなす
事古例なり、

参考　東博本　六　熊祭部　（熊祭踊図）

Image: TNM Image Archives

上2　〔熊祭花矢射図〕

【道図本釈文】
※アイヌ画譜に同じ

参考　道図本　〔熊祭花矢射図〕

参考　北博本B　〔熊祭花矢射図〕

参考　北博本A　〔熊祭花矢射図〕

【釈文】

其時群夷の中に一人両耳をとりて
背にうち乗ハ、五三人立寄、首に綱三筋
結ひ付、あなたこなたと心侭にくるひ
遊セ、首長(ヲトナ)傍にありて、山の方に向ひ
矢を放つ、カモ井シノヲマンデノウと
唱ふ、夫より男夷ハ嬰子に
至るまて假に弓矢を製し
持せ、先其所の首長の
一男か又は熊を飼置
家の子か射初なり、矢の
當るのミ疵ハつかす、

【東博本釈文】

其時**衆**夷の中に一人両耳を
取りて背に**打**乗**れ**ハ、五三人立
より、首に綱三筋結ひ付、あ
なたこなたと心侭にくるひ遊
セ、**酋**長(ヲトナ)**側**にありて、山の方に
むかひ矢を放つ、カモ井シノ
ヲマン**テ**ノウと唱ふ、夫より
男夷**は**嬰子に
至るまて假に弓矢を
製し持**セ**、先其所の
酋長の一男又は熊を
飼置家の子**おして**
射初**しむ**、矢の當るのミ
にして疵**は**つかす、

参考　東博本　六　熊祭部　〔熊祭花矢射図〕

Image: TNM Image Archives

上3　〔熊祭挟殺図〕

【道図本釈文】
※アイヌ画譜に同じ

参考　道図本　〔熊祭挟殺図〕

【釈文】

長八尺ばかりなる木を三本
かね〳〵作り置、射支終れは
首を木の上に引すへ、上よりも
木にて押へ、胴へも横に木をかけ
押殺す、時に白銀作りの太刀を
首に當るのミ、少しも刃物を
用ひす、此時所によりて
むらかる夷に栗の実、粢を
まきかけるもあり、育たる
婦ハなけきに堪す、ふし
まろふはかりなり、

参考　北博本A　〔熊祭挟殺図〕

【東博本釈文】

長八尺**は**かりなる木を三本
かね〳〵作り置、射**事**終れは
熊の首を木の上**へ**引すへ、上
より木**ニ**て**おさ**へ、胴へも横に
木をかけ押殺す、時に白銀
作りの太刀を首に當るのミ、
少しも刃物を用ひす、此時
土地によりてむらかる夷に
栗の実、粢**の**まき**掛**るも
あり、育たる婦ハ**歎**きに
たへす**して**、**伏**しまろ**ひて**
是を悲しむ、

参考　北博本B　〔熊祭挟殺図〕

参考　東博本　六　熊祭部　〔熊祭挟殺図〕

Image: TNM Image Archives

上4　〔熊祭神酒飲図〕

【道図本釈文】
※アイヌ画譜に同じ

参考　道図本　〔神酒飲図〕

参考　北博本B　〔熊祭神酒飲図〕

参考　北博本A　〔熊祭神酒飲図〕

【釈文】

造飾したるヌシヤサンカタ（幣代をかさりたる棚）に太刀（タンチ子ツブ）、短刀（エモシ）、玉器（シトキ）、
其外金銀鏤たる器種々かさり、あるとある宝器を
出してあかなへり、扨殺したる熊を席の中央に置、
夷服を着さしめ、耳鐶、又太刀を帯さしめ、酒食を
供し、拝禮厳重になし、祝詞曰首長、

我神（チコルカモ井）　至今（タ子ハツクノ）　為神（カモ井ニアヌワ）　今日（タンドアナキ子）
送兄（ヲマンデエアンル井クバン　夷言称神曰ヱ、蓋敬神之意、ヱ此言兄）　再（シユカンナ）
神而来（カモ井ニアヌワ）　明年（ヲヤバ）　我自（チコルナンコルクシユ）　執之
今（タ子アナキ子）　兄（エヲロタサランハ）　敢（クキナンコンナ）　辭

集會の男女夫々に言挙て、
神の出立太刀を帯し、衣服
耳鐶粧ひいさましき有様なとゝ
祝し、神酒飲（カモイノミ）をぞはしめける、

※2行目上から5字目は「鏤」で代用した。
（東博本釈文も同様）

【東博本釈文】

造飾したるヌシヤサンカタ（幣代をかさりたる棚）に太刀（タンチ子ツブ）、
短刀（エモシ）、玉器（シトキ）、其外金銀鏤たる器種々**飾**、
あるとある宝器を出して
あかなへり、扨殺したる
熊を中央に置、夷服を
著さしめ、耳**環**、又太刀を
帯さしめ、酒食を供し、
拜禮厳重に**して**、**酋**長
たる者祝詞して曰、

我神（チコルカモ**イ**）　至今（タ子**バ**ツクノ）　為神（カモ**イ**ニアヌワ）　今日（タンドアナキ子）
送兄（ヲマンデエアンル**イ**クバン　夷言称神曰ヱ、蓋敬神之意、ヱ此言兄）
再（シユカンナカモ**イ**）　神而来（カモ**イ**ニアヌワ）　明年（ヲヤバ）
我自（チコルナン**カ**ルクシユ）　執之　今（タ子口キ子）
兄（エヲロタサラン**バ**）　敢（クキナンコンナ）　**辞**

集會の男女夫々に
言挙て、神の出立
太刀を帯し、衣
服**を着し**、耳**環**
を粧ひいさまし
き有様なとゝ祝
し、神酒飲（カモイノミ）を**そ**
始めける、

参考　東博本　六　熊祭部　（熊祭神酒飲図）

Image: TNM Image Archives

上5　〔熊祭酒宴図〕

【道図本釈文】
※アイヌ画譜に同じ

参考　道図本　〔熊祭酒宴図〕

参考　北博本B　〔熊祭酒宴図〕

参考　北博本A　〔熊祭酒宴図〕

【釈文】

此時は支配人、番人を賓客として、子供従僕（ウタレ）のはて迄も酒を飲、飽さしめて、三五日か中ハ躍さま〳〵に振舞ける、翌日ハ熊の皮を剥、肉を養にして喰ふ、頭ハ木幣を付て、ヌシヤに祀り置ぬ、

一、熊を殺し直に皮を剥、頭を付て、杭の長さ三尺はかりなるを立、彼皮を着セ全體を作り、衣服、太刀を帯させて、酒食を供する所もあり、亦家の中に祝るもあり、遠近所々にて、少しつゝ異れり、

蝦夷島の熊五種あり、曰熊（ホクユク）、曰羆（ヲンチホクユク）、曰アルキツフハ羆の又長大なるなり、希に深山より出る大さ丈に至る、人を見て襲きたる、夷言アルキツフハ来る器といふことなり、蝦夷人獲るといへとも食せす、此則酋羆なり、傳言、大木の精化してなれるとて、斧にて切断して山に捨る、又化して木となるよし、本草綱目狗條下、時珍曰、又有老木之精状如黒狗而無尾、名曰彭候可以烹食無情化有情精霊之變也、

曰魋、曰白熊、此二種ヱトロー島に出る、

時珍曰、熊、羆、魋三種一類也、如豕色黒者〔熊也〕、大而色黄白羆也、小而色黄赤者魋也、建平人呼魋、為赤熊、陸機謂羆、為黄熊是矣、羆頭長脚高猛憨多力、能抜樹木、虎亦畏之、愚人則人立而攫之、故俗呼、為人熊關西呼

猳熊、羅願、爾雅翼云、熊有猪熊、形如豕、有馬熊、形如馬、即羆也、或云、羆即熊也雄者、

【東博本釈文】

此時は支配人、番人を賓客として、子供従僕（ウタレ）のはて**迄**も酒を飲、飽さしめて、三五日か中**は**さま〳〵に**躍**、振舞**をしぬ**、翌日**は**熊の皮を剥**き**、肉を養にして喰ふ、頭**は**木幣を**附**て、ヌシヤ**ニ祭**り置ぬ、又熊を殺し直に皮を剥、頭を**附**て、杭の長さ三尺はかりなるを立、彼皮を着セ全體を作り、衣服、**大**刀を帯さ**セ**て、酒食を供する**處**あり、**又**家の**内**に**祭**るもあり、遠近**處**々にて、少しつゝ異れり、

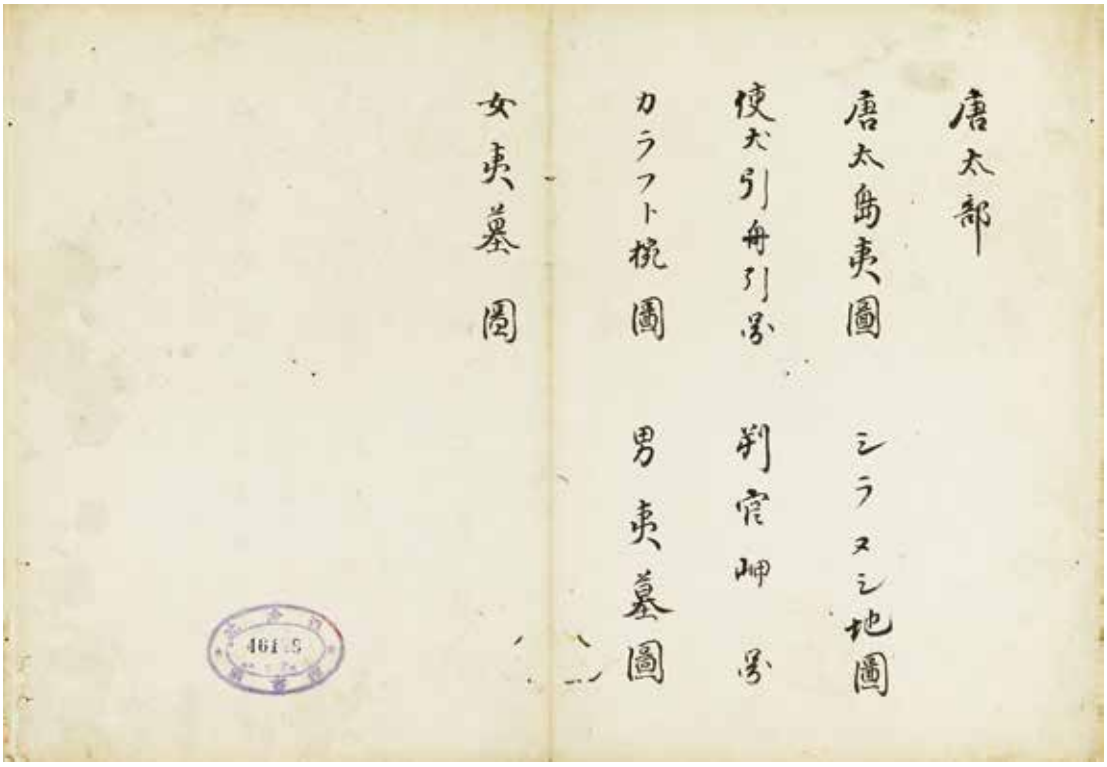
蝦夷島の熊五種あり、曰熊（ホクユク）、曰羆（ヲンチホクユク）、曰アルキツフハ羆の**また**長大なる**者**なり、希に深山より出る大さ丈に至る、人を見て襲**来**る、アルキツフハ**夷言にて**来る器といふことなり、蝦夷獲るといへとも食**セ**す、**是**則酋羆なり、傳**へ云**、大木の精化してなれるとて、斧にて切断して山に捨る、又化して木となる**と**、本草綱目狗條下、時珍曰、又有老木以精状如黒狗而無尾、名曰彭候可情精霊之**変**也、曰魋、曰白熊、此二種ヱトロー島に出る、

時珍曰、熊、羆、魋三種一類也、如豕色黒者〔熊也〕、大而色黄白羆也、小而色黄赤者魋也、建平人呼魋、為赤熊、陸機謂羆、為黄熊是矣、羆頭長脚高猛憨多力、能抜**樹**木、虎亦畏之、**見**人則人立而攫之、故俗呼、為□□**関**西呼猳熊、羅願、爾雅翼云、熊有猪熊、形如□□□熊、形如馬、即羆也、或云、羆即熊**之**雄者、

参考　東博本　六　熊祭部　（熊祭酒宴図）

Image: TNM Image Archives

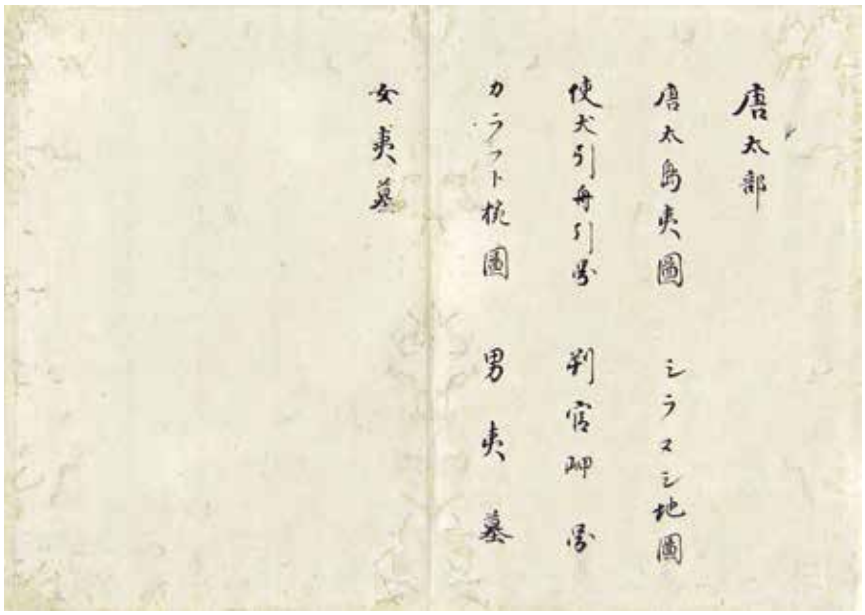
下1　唐太部（唐太部目録）



【釈文】
唐太部
唐太島夷圖　シラヌシ地圖
使犬引舟引圖　判官岬圖
カラフト椀圖　男夷墓圖
女夷墓圖

【東博本釈文】
唐太部
唐太島夷圖　シラヌシ地圖
使犬引舟引圖　判官岬圖
カラフト椀圖　男夷墓
女夷墓

参考　東博本　十二　唐太部　（唐太部目録）



下2　唐太島夷図

【釈文】

カラフト嶋ハ西夷地ソウヤより西廿里にあり、
嶋の極を盡す者なし、明和年間松前家
臣和田某を遣して五十有余里を順島さしむ、
夫よりシラヌシに館を建て鎮護す、
享和改元年五月信濃守源忠明奉
台命西夷地を回り、屬吏中村意積、
高橋一宅に命して南北二百余里の
地理を視しむ、古へよりカラフト人、
山丹人共にソウヤに来り、持渡る錦、
玉、煙管の種々、獺、狐、狸、鹿の
皮と交易す、煙管にハ満文を刻す、
漢字を記したるもあり、錦ハ唐山、蘇州
にて製せるを韃靼に渡り、山丹を
経て蝦夷島に渡来す、蘇州の織臣
相瑞と織入しを予蔵セり、初め此
島の夷山丹夷と共にソウヤに来り、韃靼服
を着したり、故に唐人（カラフト）と云しより嶋名と
なりたると云、シラヌシより西百余里に
タラ井カと云所あり、是此島の名なるよし、
ソウヤ酋長ヲタトモンクルかたれり、
一、風俗も蝦夷とハ少し異り、服も
蕁麻糸にて織り、文繡如圖、冬春ハ
穴居し、土鍋、埴物を製し用ゆ、
また家々に犬を飼ふ、児犬の時
陰嚢を破り、玉を抜取育つれハ、後
勇猛多力にして、舟を引、亦雪中
車を牽く、雌犬に交合の氣を
發セす、すへて此島葬祭、墳にいたる
まて蝦夷島の製とハ異る、

【東博本釈文】

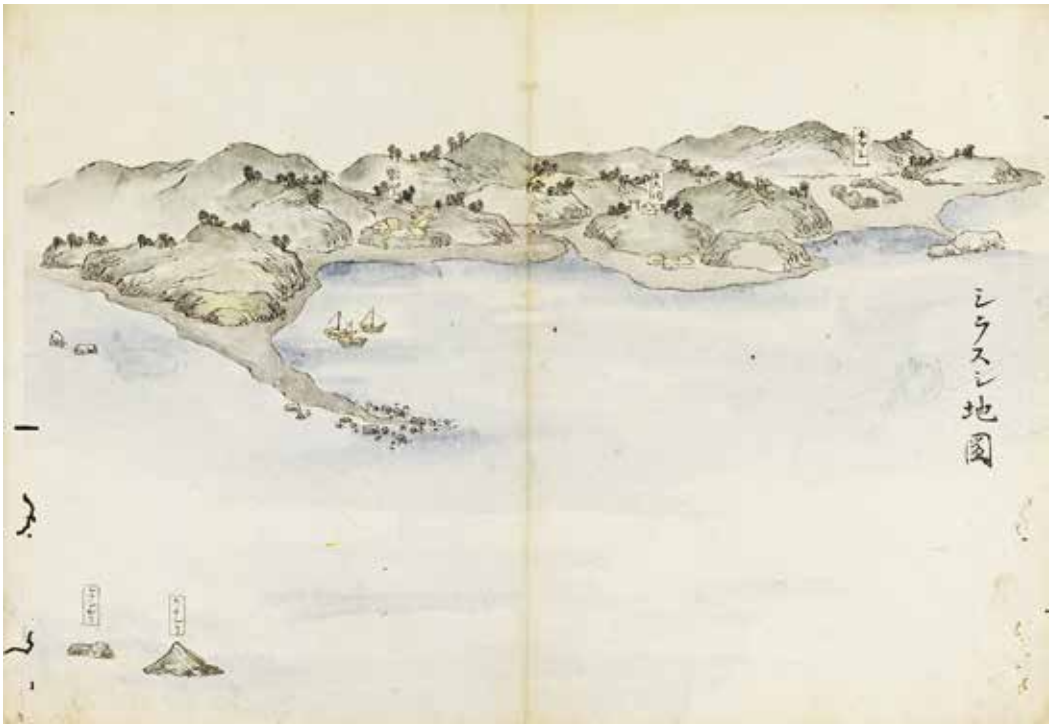
カラフト**島**ハ西夷地ソウヤより西廿里にあり、
島の極を盡す者なし、明和年間松前家
臣和田某を遣して五十有余里を順島さしむ、
夫よりシラヌシに館を建て鎮護す、
享和改元年五月信濃守源忠明奉
台命西夷地を回り、屬吏中村意積、
高橋一宅に命して南北二百余里の
地理を視しむ、古へよりカラフト人、
山丹人共にソウヤに来り、持渡る錦、
玉、煙管の種々、獺、狐、狸、鹿の
皮と交易す、煙管にハ満文を刻す、
漢字を記したるもあり、錦ハ唐山、蘇州
にて製せるを韃靼に渡り、山丹を
経て蝦夷島に渡来す、蘇州の織臣
相瑞と織入しを予蔵セり、初め此
島の夷山丹夷と共にソウヤに来り、韃靼服
を着したり、故に唐人（カラフト）と云しより**島**名と
なりたると云、シラヌシより西百余里に
タラ井カと云所あり、是此島の名なるよし、
ソウヤ酋長ヲタトモンクルかたれり、
一、風俗も蝦夷とハ少し異り、服も
蕁麻糸にて織り、文繡如圖、冬春ハ
穴居し、土鍋、埴物を製し用ゆ、
また家々に犬を飼ふ、児犬の時
陰嚢を破り、玉を抜取育つれハ、後
勇猛多力にして、舟を引、亦雪中
車を牽く、雌犬に交合の氣を
發セす、すへて此島葬祭、墳にいたる
まて蝦夷島の製とハ異る、

参考　東博本　十二　唐太部　唐太島夷図

Image: TNM Image Archives

参考　道図本　（唐太島夷図）

下3　シラヌシ地図



チヤシ
弁天祠
シラヌシ會所
リイシリ
レブンシリ

【釈文】
シラヌシ地圖

参考　東博本　十二　唐太部　シラヌシ地図

チヤシ
弁天祠
シラヌシ會所
リイシリ
レフンシリ

【東博本釈文】
シラヌシ地圖

Image: TNM Image Archives

下4　使犬引舟図

【釈文】
使犬引舟圖

【東博本釈文】
使犬引舟圖

参考　東博本　十二　唐太部　使犬引舟図

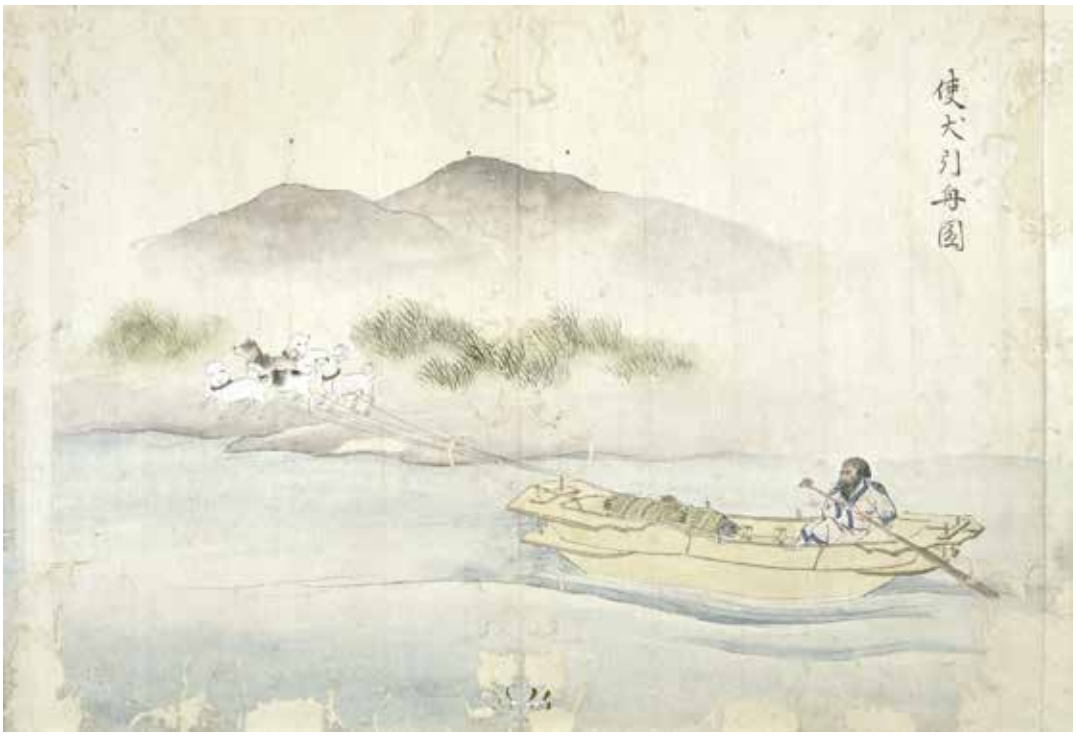


Image: TNM Image Archives

下5　判官岬図

【釈文】
夷傳へいふ判官、此島に
渡り、自像を石にて建、山
丹の地方に渡り行給ふ
と、

【東博本釈文】
夷傳へいふ判官、此島に
渡り、自像を石にて建、山
丹の地方に渡り行給ふ
と、

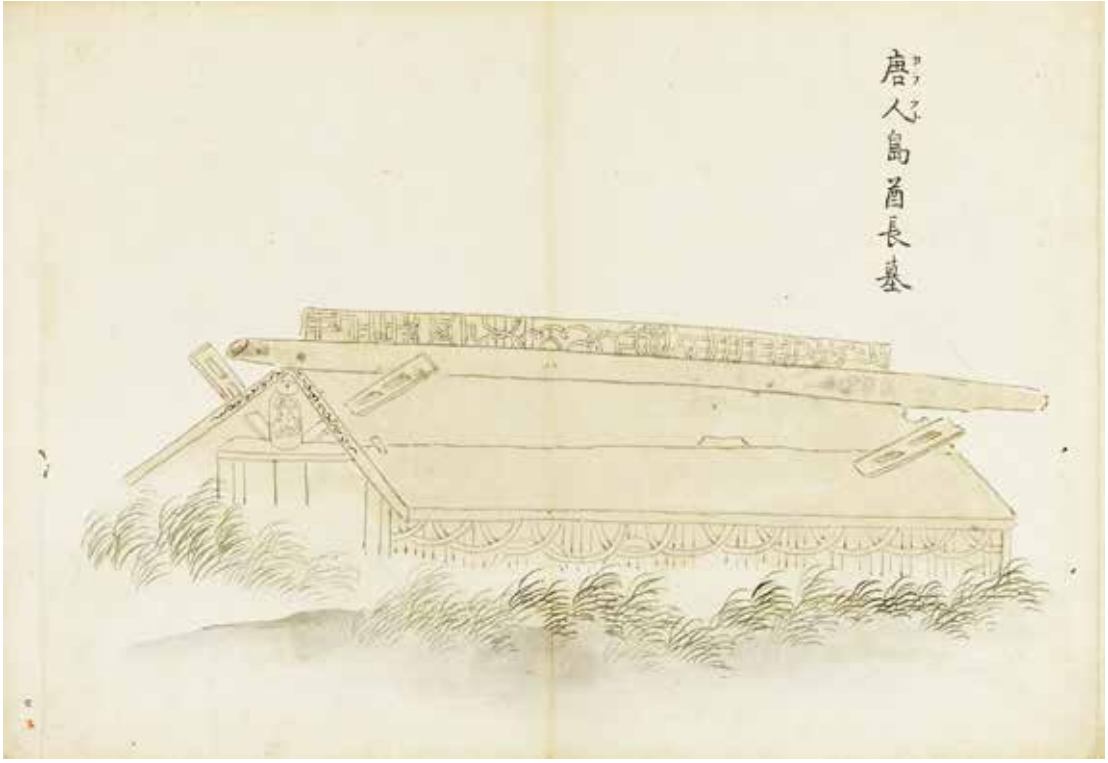
【道図本釈文】
夷云傳ふ判官、此島に
渡り、自像を石ニて建、
山丹の地方に渡り行
給ふよし云傳ふ、

参考　東博本　十二　唐太部　判官岬図

参考　道図本　（判官岬図）

Image: TNM Image Archives

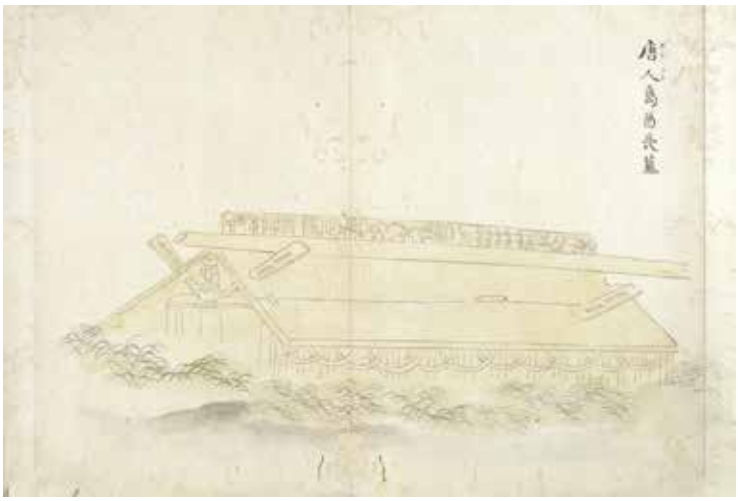
下6　唐人島酋長墓



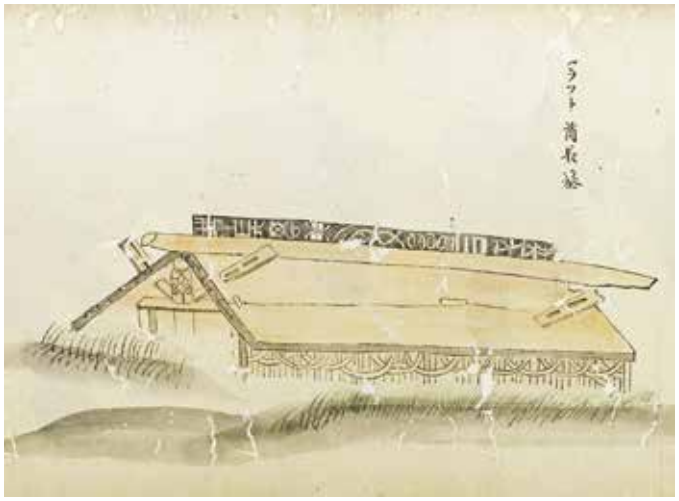
【釈文】
唐人島酋長墓

【東博本釈文】
唐人島酋長墓

【道図本釈文】
カラフト酋長墓



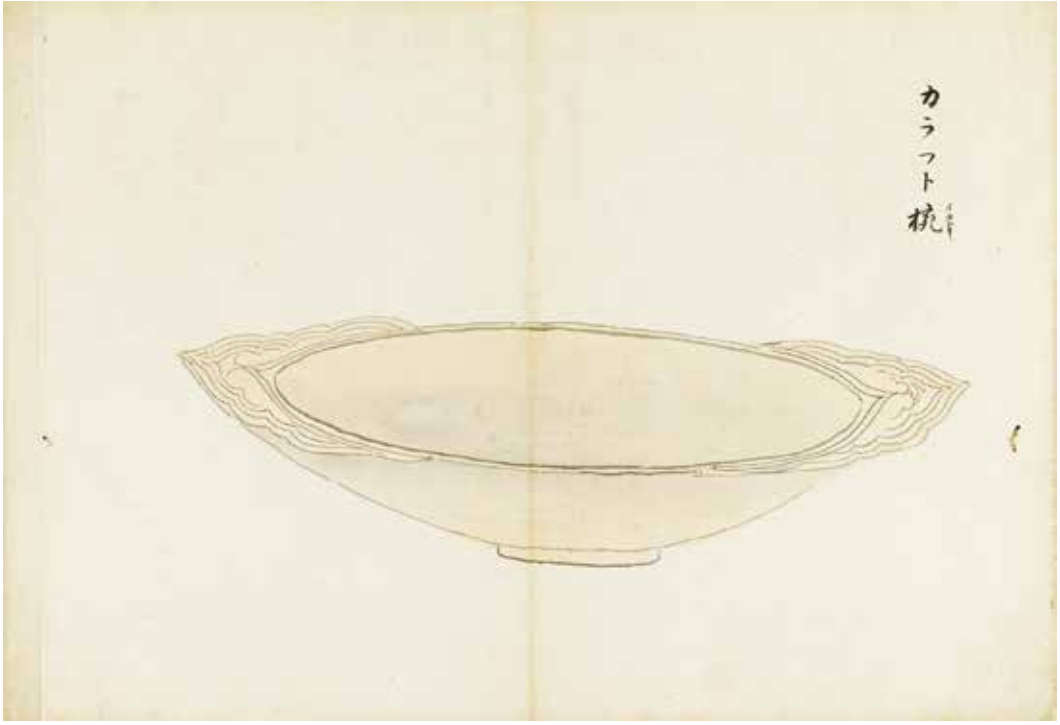
参考　東博本　唐人島酋長墓



参考　道図本　カラフト酋長墓

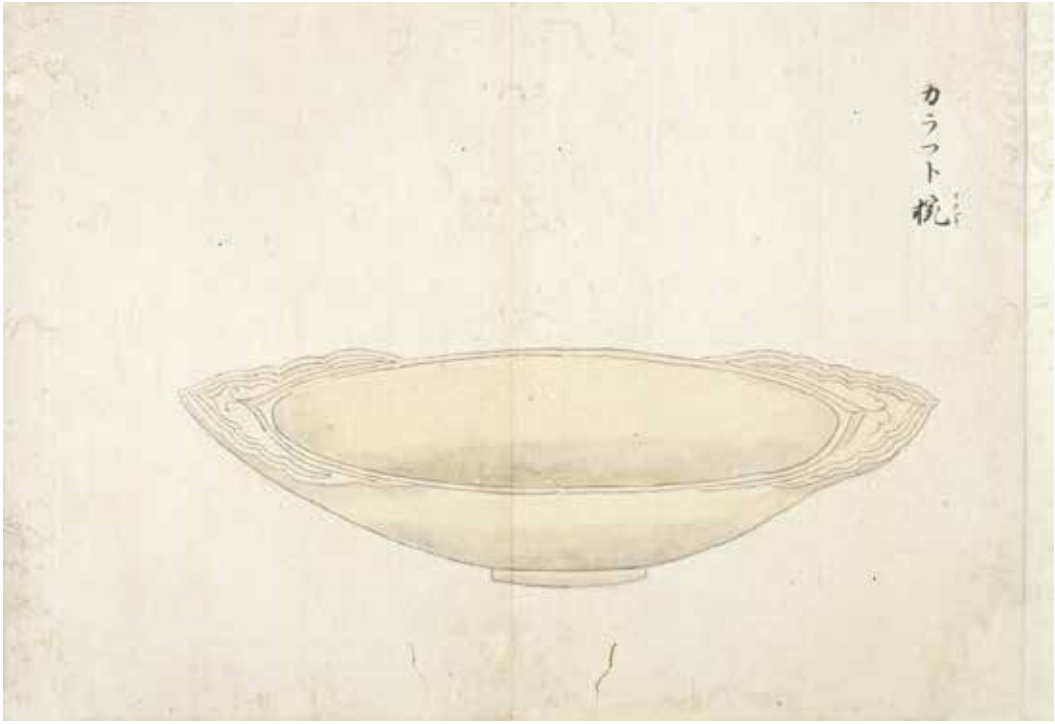
Image: TNM Image Archives

下7　カラフト椀



【釈文】
カラフト椀（イタンキ）

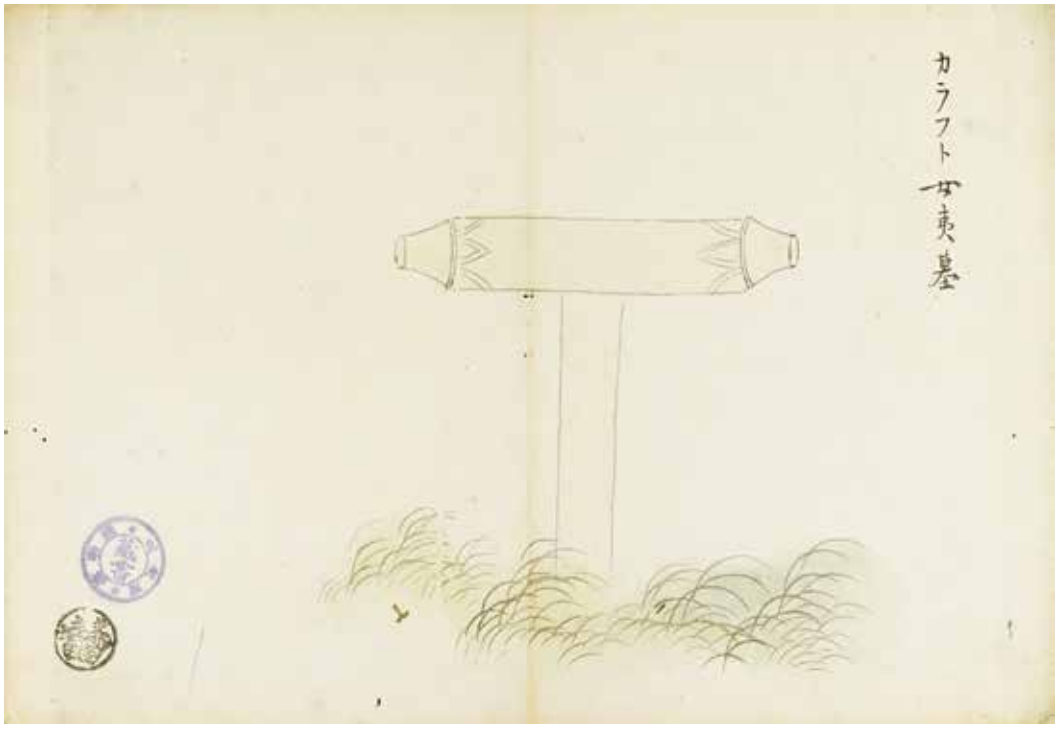
参考　東博本　カラフト椀



【東博本釈文】
カラフト椀（イタンキ）

Image: TNM Image Archives

下8　カラフト女夷墓



【釈文】
カラフト女夷墓

【東博本釈文】
カラフト女夷墓

【道図本釈文】
カラフト女夷墓

参考　東博本　カラフト女夷墓

参考　道図本　カラフト女夷墓

Image: TNM Image Archives

三　各場面の考察

ここでは各場面ごとの特徴について、東博本と比較する形で考察を行う。絵の細かい筆致などの検討については、美術史家の考察も俟ちたい。

1　上1　〔熊祭踊図〕

「イヨマンテ（イヨヲマンテ）」（クマ祭り・クマ送り）と称する儀式の一節を描いた絵と説明を記した場面である。東博本の「六　熊祭部」にも似た場面の描写がある。画面右の真ん中で、座す三人の男性が「弊木（イナヲ）」を削る一方で、「篭」（クマ檻）のまわりで十数人が「躍（リムセ）」をしている場面である。

東博本との主な相違点は、クマ檻のまわりで踊る人たちの人数（『アイヌ画譜』は十五人、東博本は十四人）、画面左の真ん中で手を挙げて踊る裸の子どもの有無、クマ檻右の男性が木皮衣(6)の上に羽織る赤色系の上着の文様の有無、地面の草の描写の有無、画面右下ゴザ上の片口（漆器）の文様の有無、踊る人物たちが腰から提げているタバコ入れや物入れなどの描写の有無(7)、クマ檻左の女性の首飾り（青玉に赤の漆器）の描写の有無（東博本は男性の描写）などである。絵の構図としては東博本とほとんど遜色ない程度、もしくはそれ以上の情報量の描写と言える。詞書については、言い回しの細部、行立てに多少の相違がある程度であり、東博本と遜色ない内容情報である。

東博本の〔熊祭踊図〕の絵の描写法と詞書の筆蹟は、檍丸の典型的なそれである(8)。それに対し『アイヌ画譜』〔熊祭踊図〕の絵と詞書の解釈にはより総合的な検討を要するので、本稿次章「四　総合考察」にてまとめて私見を述べることとする。詞書の筆蹟はともかく、とりわけ絵に関しては、例えば人物の顔や髪の描き方などに注目しても、東博本とは著しい相違があり、檍丸の自筆とする根拠を筆者は見出せない（写真1参照）。

以上の考察から、本場面は、情報量的に東博本と遜色のない類似図であるとだけ、ここでは指摘しておきたい。

なお、道図本にも同場面が収録されている。絵の描写法は『アイヌ画譜』とは異なるが、絵の情報量は『アイヌ画譜』とほぼ同等であり、詞書の筆蹟は同筆である。しかも詞書の記載は、内容や行立てまでほぼ一致することには注目しておきたい（次頁写真2参照）。

写真1　上：アイヌ画譜
下：東博本（部分）
Image: TNM Image Archives

2　上2　〔熊祭花矢射図〕

「イヨマンテ」の一節を描いた絵と説明を記した場面であり、東博本の「六　熊祭部」にも似た場面が収録されている。クマの首に三本の綱を結び付けたうえで、ある程度自由に動きまわるクマに向かって複数人が矢を放つ場面である。

東博本との主な相違点は、画面真ん中やや右下で手を広げ右を向く男児（着物着用）と裸の子ども（東博本）、画面真ん中右の「首長（ヲトナ）」が着用する小袖の着色（『アイヌ画譜』は薄紫色系、東博本は赤色系）、画面中央クマの右上で弓を持つ裸の子どもの有無、地面の草の描写の有無、木皮衣における帯や肩付近における文様描写の有無、クマに向けられた矢の描写（クマに四本の矢が刺さり、二本は地面に落ちている。東博本は三本の矢がクマに刺さる

写真２　上：アイヌ画譜、下：道図本
14行目「餌喰」の「ヱヘ」、15行目末の「を」の有無などを除くと筆蹟、内容、行立てが一致している。

のみで、地面に落ちた矢の描写はない）、などである。北海道博物館所蔵の『蝦夷島奇観』（北博本A、北博本B）などの同じ場面では、矢はクマに刺さっておらず、地面に落ちた状態の描写であることも多いが、『アイヌ画譜』は東博本と北博本の両方の要素を盛り込んだ描写となっている。詞書については文飾程度の相違であり、東博本と遜色ない内容情報である。

絵の描写法と詞書の筆蹟の検討は、次章「四　総合考察」で述べる。

以上の考察から、本場面も、情報量的に東博本と遜色のない類似図であるとだけ、ここでは指摘しておきたい。

なお、道図本にも同場面が収録されており、前場面と同様に、絵の情報量はほぼ同等であり、詞書の筆蹟も同筆である。

3　上3　〔熊祭挟殺図〕

「イヨマンテ」の一節を描いた絵と説明を記した場面であり、東博本の「六熊祭部」にも似た場面が収録されている。三本の木でクマを挟み、木の上に十数人が乗ってクマを挟殺する場面である。三本のうち二本はクマの首を上下で挟み、残りの一本は胴体を押さえ付けるのに用いる。画面手前のクマの頭の左手には白銀作りの太刀を持つ男性が描かれ、クマの頭の右下には、クマを育ててきた女性が俯いて嘆き悲しむ姿が描写されている。

東博本との主な相違点は、木が三本描かれていること（東博本はクマの首を挟む二本しか描写されていない）、木の上に裸の子どもを含め十五人が描写されていること（東博本は十人）、太刀への黄色・赤色系の着色、木の上の左から二番目の男性の布（内着）の着色（薄紫色系、東博本は赤色系）、周辺の草の描写の有無、木皮衣における帯の描写の有無などである。多人数で三本の大木を用いてクマを挟殺する『アイヌ画譜』の描写は、詞書に忠実な表現であり、その点で東博本は『アイヌ画譜』よりも簡素な描写と言える。詞書については文飾程度の相違であり、東博本と遜色ない内容情報である。

絵の描写法と詞書の筆蹟の検討は、次章「四　総合考察」で述べる。

以上の考察から、本場面も、情報量的に東博本と遜色のない類似図であるとだけ、ここでは指摘しておきたい。

なお、道図本にも同場面が収録されており、前場面と同様に、絵の情報量はほぼ同等であり、詞書の筆蹟も同筆である。

4　上4　〔熊祭神酒飲図〕

「イヨマンテ」の一節を描いた絵と説明を記した場面であり、東博本の「六熊祭部」にも似た場面が収録されている。挟殺したクマを「席」の中央に配置し、周囲に太刀、短刀、玉器、漆器などのありとあらゆる宝物を飾り立て酒食を供えた飾棚（祭壇）に向かって、首長が「祝詞」を述べたあと「神酒飲（カ

モイノミ）」をはじめる場面である。

東博本との主な相違点は、祭壇正面奥の木幣の形（『アイヌ画譜』は傘のように開いた形、東博本は閉じた形）、太刀や首飾りの着色や文様（『アイヌ画譜』の描写の方が細緻）、祭壇正面奥の描写（『アイヌ画譜』は木幣が立て掛けてあるように縦線を斜めに引いているのに対し、東博本は縦線を上下に引いて柵のように描き、その上に木幣を描いている）、床や側面のゴザ（アヤキナ）の文様・着色（『アイヌ画譜』は薄茶色系を基調に黒色や赤色系で文様を描写しているのに対し、東博本は緑色系を基調に黒色系で文様を描写）、クマの耳の輪の描写の有無（『アイヌ画譜』は白色系の着色ではっきりと描写）、床のゴザ上に置かれた漆器類の数・種類と文様描写（『アイヌ画譜』の方が数や種類が多く、漆器の蒔絵・沈金などの描写が東博本より細緻）、地面における草の描写の有無、祭壇手前で首長が持つ台盃の椀の側面の文様の有無、祭壇手前に座す人びとの着物（小袖、木皮衣）の描写（『アイヌ画譜』の木皮衣には帯の描写もあり）、画面右上で箱型黒漆の漆器を運ぶ人物の有無（東博本にのみ描写）、その下の箱型赤漆・黒漆の漆器を運ぶ男性二人の描写の有無（東博本は裸の子ども一人の描写）、などである。全般的に『アイヌ画譜』の方が東博本より描写が細緻である。詞書については文飾程度の相違であり、東博本と遜色ない内容情報である。なお、アイヌ語表記の拗音部分に傍線を付けている箇所がいくつか見られる（東博本では促音にも傍線表記あり）。

絵の描写法と詞書の筆蹟の検討は、次章「四　総合考察」で述べる。

以上の考察から、本場面も、情報量的に東博本と遜色のない、もしくはそれ以上の情報量を含む類似図であるとだけ、ここでは指摘しておきたい。

なお、道図本にも同場面が収録されている。場面の構図は『アイヌ画譜』と同等であり、詞書の筆蹟も同筆であるが、祭壇上に置かれた漆器に蒔絵・沈金の描写はなく、全般的に『アイヌ画譜』よりも描写が簡素である。

5　上5　〔熊祭酒宴図〕

「イヨマンテ」の一節を描いた絵と説明を記した場面であり、東博本の「六熊祭部」にも似た場面が収録されている。「場所」において付き合いのある和人の支配人、番人を招待し、ゴザの上で十人が酒を酌み交わす場面である。詞書は、三～五日続く酒宴の後のクマ肉や皮、頭骨の扱いや蝦夷島におけるクマの種類などについて説明するが、絵は酒を飲む場面のみの描写となっている。

東博本との主な相違点は、ゴザの着色（『アイヌ画譜』は薄茶色系、東博本は緑色系が基色）、和人やアイヌが着用する羽織、小袖、木皮衣などの着色や文様（木皮衣には帯の描写もある）、台盃の椀の外側の着色（『アイヌ画譜』は赤漆（上段左端に座す年配の和人の持つ台盃には文様の描写もある）、東博本は黒漆）、画面右下の描写（『アイヌ画譜』はゴザの上に片口をもつ人物一人と行器三つ。東博本はゴザの上に行器二つと台盃一組が置かれ、大人二人と裸の子ども一人はゴザの上ではなく地面に立っている）、地面における草の描写の有無などである。構図として『アイヌ画譜』と東博本が決定的に異なるのは、画面右下のゴザ上の漆器と人物の描写である。子どもの描写がある点で東博本は詞書の内容（「子供従僕のはて迄も酒を飲」）に近いとも言えるが、酒が行器三つに満たされている描写は、大量の酒が消費される様の表現とも言え、情報量的な優劣は一様に下せない。なお、大きなゴザ上の左端の男性が着用する吉野桜の小袖には、『アイヌ画譜』には背中に「芳野」（※「野」はくずし字の異体字で表記）とあり、東博本には背中から右腰に「吉野」とある。このような同じ吉野桜の小袖の描写であっても、微妙に表現が異なる点（敢えて同じ描写としない意図）からは、両者の近縁性、あるいは何らかの深い繋がりを読み取ることも可能なのではなかろうか。詞書については文飾程度の相違であり、東博本と遜色ない内容情報である。

絵の描写法と詞書の筆蹟の検討は、次章「四　総合考察」で述べる。

以上の考察から、本場面も、情報量的に東博本と遜色のない類似図であると

だけ、ここでは指摘しておきたい。

なお、道図本にも同場面が収録されている。場面の構図は『アイヌ画譜』と同等であり、詞書の筆蹟も同筆であり、内容・行立ても一致している。なお、大きなゴザ上の左端の男性の小袖は、桜の花びらの模様であるが文字は「寿」である。

6　下1　（唐太部目録）

「唐太部」の画題が箇条書きされた目録であり、東博本の「十二　唐太部」にも似た場面が収録されている。

東博本との相違点は、「男夷墓圖」「女夷墓圖」と「圖」が付加されていることのみである。「使犬引舟引圖」は、料紙上は「使犬引船圖」となっている点も一致している。

この筆蹟について、『アイヌ画譜』と東博本が異筆であると判断する人はまずいないだろう（写真3参照）。東博本は秦檍丸の自筆と考えられるので、これも彼の手による自筆とみて間違いない。

料紙の質感から見ても、『アイヌ画譜』は後世の影写や写真複製本などではなく、東博本と同時代のころの作とみてよい。

以上の考察から、本場面は檍丸の自筆と判断しておきたい。

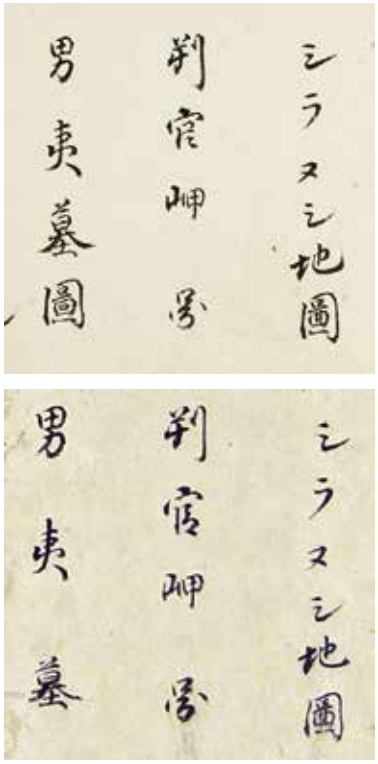


写真3　上：アイヌ画譜
下：東博本（部分）
Image: TNM Image Archives

7　下2　唐太島夷図

「カラフト嶋」の地理、松前藩士や幕吏の調査、「山丹人」の交易、「カラフト人」の風俗などについての説明と絵を記した場面であり、東博本の「十二唐太部」にも似た場面が収録されている。絵は画面右に錦（中国製絹織物の反物）を広げ見る二人の人物、画面左にイヌを牽き連れ青玉を手に持つ男性の描写である。

絵に関して、東博本との相違点はほとんどなく、強いてあげるならば、着物（木皮衣）の着色が東博本より若干薄いこと、画面左の男性の履く靴が黒色系の着色であること（東博本は薄茶色系）、画面右の青色系錦の左端が反っていること（東博本は裏側にめくれている）、赤色系錦の文様（牡丹文）の着色、などである。総じて絵の描写は東博本とよく似ており、同一人の手による可能性が高いと言える。

詞書の内容に関して、東博本との相違は、わずかに「嶋」と「島」の字の違いのみであり、文章の言い回しから行立てまで完全に東博本と一致している。

筆蹟に関しては、東博本と比べると、一見して別のように見える。『アイヌ画譜』の筆蹟は、東博本の多くの場面や檍丸自筆の『東蝦夷地名考』などに典型的に見られるものであり（写真4参照）、檍丸の自筆と考えられる(9)。この筆蹟の特徴は、筆の線が細く、いわゆる「とめ」「はね」「はらい」とそれ以外の太さに大きな違いがなく、比較的均一な線で書かれることである。書き方も檍丸らしく流麗である。これに対し東博本は、一文字一文字をしっかりと書いており、線の太さに強弱があらわれている。佐々木利和は、東博本のこの場面冒頭の「カラフト島ハ西夷地ソウヤより」の筆蹟を取り出し、国立公文書館所蔵の『東蝦夷地名考』や国文学研究資料館所蔵の『蝦夷島奇観』の字と比較し、「檍丸の特徴があらわれており、まったく同筆であることが判る」と評価している（谷澤・佐々木 一九八二：二三四）。『アイヌ画譜』と東博本の筆蹟の見た目の違和感は、使用筆あるいは書き方の違いであり、両者とも檍丸

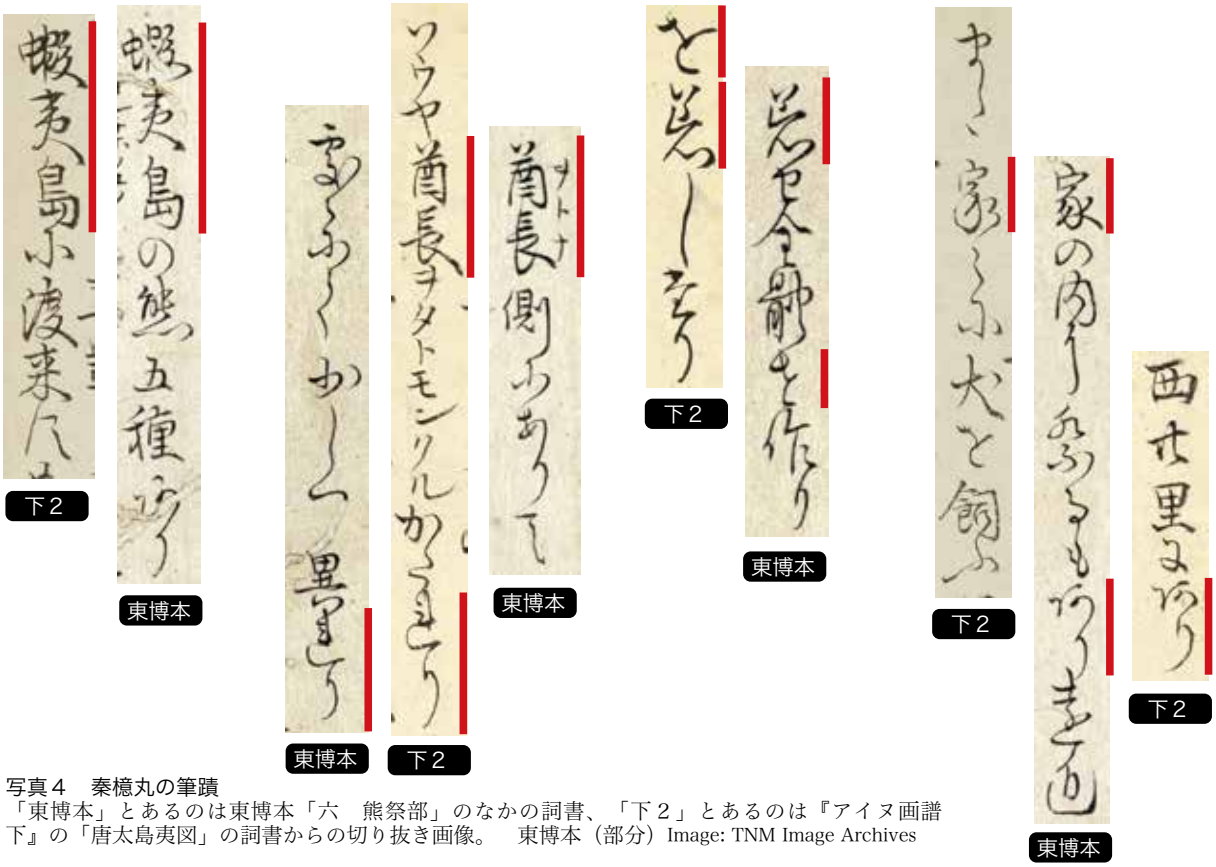


写真４　秦檍丸の筆蹟
「東博本」とあるのは東博本「六　熊祭部」のなかの詞書、「下２」とあるのは『アイヌ画譜下』の「唐太島夷図」の詞書からの切り抜き画像。　東博本（部分）Image: TNM Image Archives

の自筆と見做すことが可能である（写真５参照）。

以上の考察から、本場面は檍丸の自筆と判断しておきたい。

なお、道図本にも同場面が収録されている。詞書の筆蹟は東博本と同じであり、文章の言い回しや行立てのみならず、文字の間の取り方がとくに一致している（写真５参照）。ただし、絵に関しては、顔や髪の描写、地面への黒色系の着色、イヌを牽く綱や首輪への赤色系の着色、錦の数や着色など、いくつかの相違が見られる。

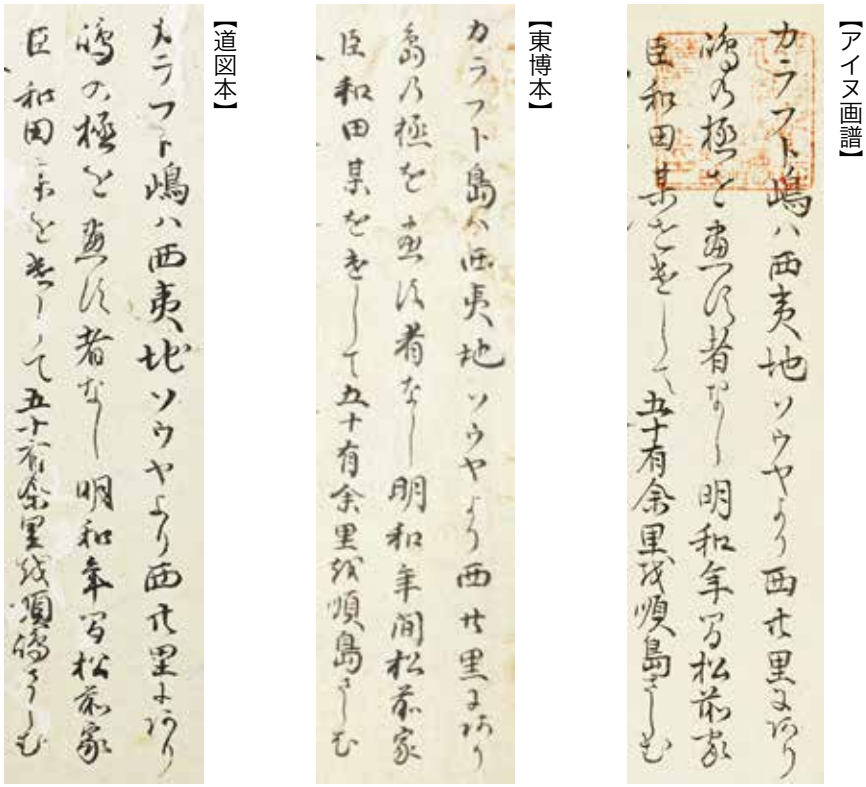


写真５　秦檍丸の筆蹟　　『アイヌ画譜』と東博本は筆の線の太さが異なるだけで、やや長体がかった「夷」の左への「はらい」や右の「とめ」、「家」の左へのやや丸みを帯びた左への「はらい」などを比べる限りは同筆と言える。『アイヌ画譜』の字が角張って見えるのは、東博本よりも細くて軽い筆を用いているからと考えられる。東博本と道図本は同筆である。

8　下3　シラヌシ地図

サハリン島西海岸南端のシラヌシ付近を海側から俯瞰的に描いた絵図（鳥瞰図）であり、東博本の「十二　唐太部」にも似た場面が収録されている。

絵に関して、山や岩の描写などに東博本との若干の差異はあるものの、全般的に相違点はほとんどなく、同一絵師が相似図を作製する僅差の範囲である。なお、こうした風景描写は、檍丸の作品である『大日本国東山道陸奥州駅路図』や『東蝦夷地屏風』、『東蝦夷地名考』などに典型的に見られるものである(10)。また、絵中に書き込まれた文字についても東博本と一致している。

以上の考察から、本場面も檍丸の自筆と判断しておきたい。

9　下4　使犬引舟図

五匹のイヌが水上に浮かぶ舟を引く場面であり、東博本の「十二　唐太部」にも似た場面が収録されている。舟上には櫂を操る男性一人と筵がかけられた魚が描かれ、遠景に山々も描かれている。

東博本との相違点は、山々の大きさ（東博本に比べ若干小さく描写）、岸辺の草への着色量（東博本の方が緑色系の着色が豊富）、イヌの毛の模様、イヌの首輪への赤色系の着色、筵への赤色系の着色、舟上の男性の着物やその文様への着色（黄色系の着色に両肩の文様部分に赤色系の着色）、櫂への着色（東博本は薄茶色系の着色）、水上への着色量（東博本の方が青色系の着色量が多い）、などである。

絵の筆致について、人物の顔の描き方など微細な部分に注目すると多少の相違はあるが（写真6参照）、輪郭線の位置はほぼ一致しており、絵全体から見れば遜色ない範囲の相違である(11)。「使犬引舟圖」の画題の筆蹟の一致などからみても、『アイヌ画譜』と東博本は同一人の手によるものと考えられる。

以上の考察から、本場面も檍丸の自筆と判断しておきたい。

10　下5　判官岬図

写真6　上：アイヌ画譜
下：東博本（部分）
Image: TNM Image Archives

判官・源義経がこの島に渡り、自像を石にて建て、「山丹」の地方に渡ったという、いわゆる義経蝦夷渡伝説の説明と海岸部崖の岬を海側から俯瞰的に描いた絵図（鳥瞰図）であり、東博本の「十二　唐太部」にも似た場面が収録されている。この絵と詞書からでは、サハリン島のどの岬を描いたものなのか、または架空の描写なのかは判別できない(12)。

絵に関して、東博本との相違点は、岩の形や数、陰影の着色、木の位置などを指摘できるが、全般的には同一絵師が相似図を作製する僅差の範囲である。詞書の筆蹟は、見た目には違いがあるものの、これも筆や書き方の違いによる差の範囲であろう。

以上の考察から、本場面も檍丸の自筆と判断しておきたい。

なお、道図本にも同場面が収録されている。絵は『アイヌ画譜』や東博本によく似てはいるが、岩肌の描写などが簡素である。ただ、詞書の筆蹟は東博本と同じであり、檍丸の自筆と考えられる。

11　下6　唐人島酋長墓

サハリン島アイヌの有力者の墓の絵であり、東博本の「十二　唐太部」にも

似た場面が収録されている。近藤重蔵『辺要分界図考』にも似た絵が収録されており、そこには「夷人楊忠貞墳墓之図」との画題が添えられている(13)。「楊忠貞」は、サハリン島西海岸ナヨロ村の長・ヨーチイテアイノのことで、中国清朝から満洲語の文書と「楊忠貞」の名を授かった人物である。中国清朝の権威を傘にサハリン島南部において強大な権勢を奮っていた人物だったと考えられるので、死後にこの絵のような墓が作られたのであろう(14)。

東博本との相違点は、画題の筆蹟程度であるが、先に検討したとおり、『アイヌ画譜』は細字であり、東博本はやや太い線があらわれているのみで、両者は憶丸の自筆と見てよい。絵に関してはほとんど一致している。

以上の考察から、本場面も憶丸の自筆と判断しておきたい。

なお、道図本にも「カラフト酋長墓」との画題の同場面が収録されている。『アイヌ画譜』や東博本との大きな違いは、屋根上の文様のある長板への黒色系の着色である。近藤重蔵『辺要分界図考』収録の絵にも、この部分に黒色系の着色が施されているものがある(15)。この絵の成立を考察するうえで興味深い事例である。

12　下7　カラフト椀

真ん中を刳り抜き把手に文様を施した木製器物を描いた絵であり、東博本の「十二　唐太部」にも似た場面が収録されている。

この絵と画題の文字の筆蹟に対して、東博本との相違点を見出すのはきわめて困難である。

以上の考察から、本場面も憶丸の自筆と判断しておきたい。

13　下8　カラフト女夷墓

サハリン島アイヌの女性の墓を描いた絵であり、東博本の「十二　唐太部」にも似た場面が収録されている。

この絵と画題の文字の筆蹟に対しても、東博本との相違点を見出すのはきわめて困難である。画面中央より若干右に描写し、なおかつ若干斜め右に傾斜して描写する点も一致している。

以上の考察から、本場面も憶丸の自筆と判断しておきたい。

なお、道図本にも「カラフト女夷墓」との画題のある同場面が収録されている。こちらは墓木に対して薄黒色系の着色を施し、文様を描いている。また地面に小枝を描き、赤色系の絵具で花を表現している。画面やや右に描写し、斜め右に若干傾斜した形で描写する点などは一致している。

四　総合考察

ここでは前章までの考察を総合的に解釈し、『アイヌ画譜』に関する筆者の私見を述べてみたい。

『アイヌ画譜』は上巻と下巻の二帖とされ、どちらも同じ表装の折本に仕立てられてはいるが、横の法量に差があり（上巻は二〇・五㎝、下巻は一九・五㎝）、なおかつ仕立て方に大きな違いがある。

東博本「六　熊祭部」の類似図からなる上巻は、開口時に一枚の料紙が一面に展開するように料紙が台紙に貼付されている（写真7）。料紙も台紙も通常の古文書などの料紙よりも厚手である。料紙が厚手なのは、おそらく薄美濃紙を二枚重ねて料紙としているからであろう。開口時の天地端奥に余白は見られないが、中央の折り目部分は裂けている（写真8）。通常の折本は、料紙中央の折り目が裂けることはほとんどない（東博本にも折り目はあるが料紙自体は裂けてはいない）。料紙が中央で縦に裂けるのは、よほど開閉回数が蓄積され、擦れにより資料自体が劣化した場合であるが、例えそうであったとしても相当な回数開閉しなければ折り目が裂けることはない。しかし本資料は、すべての場面の料紙がオモテ丁とウラ丁で縦に裂けている（表面は裂けているが、台紙の裏側でテープ補強されている。写真9）。本資料がこのような状態なのは、仕立て方が通常の折本とは異なるからであろう。おそらく本資料は、折り

写真8　料紙中央の裂け

写真7
開口時の台紙（26.8×40.6cm）から料紙がはみ出していない。

↑
折本の折り目

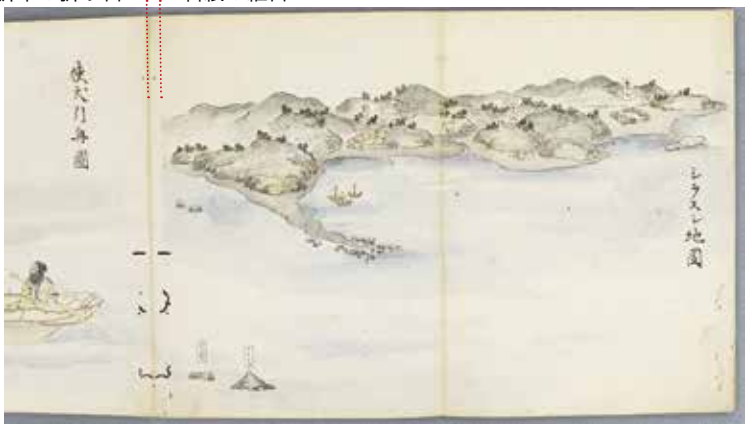


写真10　開口時の左端（折り目の直右）に次の料紙の端が見える。

写真9　台紙裏側のテープ補強

目が付いた状態の台紙に合わせて料紙を貼付したと考えられる。

一方、東博本「十二　唐太部」の類似図からなる下巻は、料紙が裂けてはおらず、また開口時に一枚の料紙が一面に展開されるように料紙を台紙に貼付してはいない。開口すると、料紙の端（右端）が前のオモテ丁の奥（左端）にあらわれ、開口時のオモテ丁の奥（左端）には次の料紙の端があらわれる。すなわち、各料紙の端に縦の折れ目が付いており、折本全体で折り目が料紙の端とズレているのである（写真10）。この仕立て方は、料紙を横に継いだものを台紙に貼付してから、折り目を付ける方法である。東博本も開口時に折り目がズレていることから、『アイヌ画譜』の下巻と東博本は、折本の仕立て方が同じと言える。

以上を踏まえたうえで、『アイヌ画譜』の上巻と下巻を総合的に考察してみよう。

1　『アイヌ画譜』上巻について

『アイヌ画譜』上巻には、東博本の「六　熊祭部」の五場面と同一の場面が収録されており、順序に違いもない。絵の構図について、細部で東博本と異なる部分も見受けられるが、全般的な情報量としてはほとんど遜色ない程度、もしくはそれ以上の情報量の描写である。情報量において東博本に劣ることはなく、むしろ東博本の方が描写される人物の数が少なく、背景の地面の草の描写がない点だけを取り上げても、『アイヌ画譜』よりも簡素な描写と言える。とりわけ特徴的なのは、上4〔熊祭神酒飲図〕における祭壇上の漆器類の蒔絵・沈金の金粉を使用しての細緻な描写である（写真11）。通常の写本では、ここまで豪華に描き上げることはないだろうから、このことは『アイヌ画譜』上巻が単なる『蝦夷島奇観』写本という域を越えた存在であることを窺わせる。

写真11　金粉を用いて細緻に描写されている。

絵の筆致は、五つの場面すべてが同じであり、五場面は同じ書き手による描写である（写真12参照）。ただし、東博本の筆致とは異なる（写真13参照）。とりわけ人物の容貌や髪の毛の描写が東博本とは異なり、強いて言えば『アイヌ画譜』上巻の方が丁寧である。毛量は『アイヌ画譜』上巻の方が豊かな描写となっており、頭頂部の禿げの描写も東博本より控えめである。

詞書の筆蹟は、五つの場面すべてが同じであり、五場面は同じ書き手による描写である。ただし、東博本の筆蹟とは違うように見える。

なお道図本にも「熊祭部」に関する同様の場面が含まれており、人物の容貌や髪の描写などは明らかに違えど、絵の構図は『アイヌ画譜』上巻とほとんど同じであり、詞書の内容・筆蹟は同筆である（二四頁写真2参照）。このことから道図本と『アイヌ画譜』は、どちらかが原本で、どちらかがその模本、もしくは両者とも別の原本を元にした模本と考えられる。

以上の考察から、『アイヌ画譜』上巻は、東博本の模本ではなく、東博本の前段階の『蝦夷島奇観』「熊祭部」の姿を伝える貴重な写本である可能性が浮上する。東博本は檍丸晩年に近い一八〇七（文化四）年の成立とされ、情報量としては絵、詞書とも最も充実した完成形と考えがちなので、それより情報量の多い『アイヌ画譜』上巻を、東博本成立よりも後に檍丸以外の人が描いた写

写真13　東博本（部分）
Image: TNM Image Archives

写真12　アイヌ画譜

写真12と写真13は左右で対になるように同一箇所を並べたものである。上から1段目は〔熊祭踊図〕、2段目は〔熊祭花矢射図〕、3段目は〔熊祭挟殺図〕、4段目は〔熊祭神酒飲図〕、5段目は〔熊祭酒宴図〕の一部の切り抜き画像である。

本と見做す解釈がまず一つあるだろう。しかし、「熊祭」を題材とした作品（作者が檍丸か別人かはともかく）が東博本成立以前から別に存在し、東博本を制作する段階でそれを『蝦夷島奇観』のなかに情報量を抑えた形で取り込んだという解釈も成り立つ。そもそも東博本の一～十二の部のうち、「六　熊祭部」と「八　膃肭臍漁部」の二巻には目録がなく、両部はいくつかの連続した場面を順列により一つの物語として提示する構成になっている。「八　膃肭臍漁部」には、最初に総論としての「総説」がある。一方、「六　熊祭部」に「総説」はないが、他部で目録に相当する料紙のある箇所に白紙の料紙が一枚含まれている。ここには、目録を示す予定だったのか、あるいは「熊祭部」の総説の詞書を示す予定だったのかは定かではない。いずれにせよ、この東博本「熊祭部」の構成の他部との相違には、今後注目していく必要があるだろう。

クマ祭りを題材に従来のアイヌ文化起源・成立論に疑問を呈した池田貴夫は、『蝦夷島奇観』（東博本）の五つの「クマ祭り図」について「それ以前に描かれた小玉貞良などのクマ祭り図とは作風を異にし、またクマ祭り図に記された文字情報も、それ以前の代表的な文献資料を遥かにしのぐ情報量を有している」との見解を示している（池田 二〇〇九：九八）。また、クマ祭りについて佐々木利和は論文「イオマンテ考」において、秦檍丸『蝦夷見聞記』の記述をもとに、この文化現象の復元を試みている（佐々木 二〇一三）。

近世アイヌ文化の中核をなすとされるクマ祭りを再検証する意味においても、『蝦夷島奇観』の東博本以前の姿を探究する必要があると言える。本資料はその手がかりとなる可能性を秘めた写本と評価できる。ただし、『アイヌ画譜』上巻が東博本の成立以後の成立である可能性もあるので、この点について、現段階では答えを出せないが、今後の『蝦夷島奇観』写本の研究の進展により、答えを導出できるものと考えている。

2　『アイヌ画譜』下巻について

『アイヌ画譜』下巻は、東博本「十二　唐太部」の八場面と同一の場面を収録するが、順序に若干の違いがある。ただし、〔唐太部目録〕の順番からすると、『アイヌ画譜』下巻も東博本も目録と一致していない。

絵の構図、筆致、詞書の内容・筆蹟、そして折帖の仕立て方から見ると、『アイヌ画譜』と東博本は酷似している。絵の筆致の微細な部分や着色に注目すると両者に多少の相違はある（写真14参照）。しかし、手稿の場合、同人物による同場面の描写の絵二つが完全に一致することはないだろう。俯瞰的に見れば、絵の構図の位置関係の均整はとれている。そして、詞書や画題の筆蹟については先述のとおり檍丸の筆蹟とみてよい。したがって本稿では、『アイヌ画譜』下巻は東博本「唐太部」と同様、秦檍丸の自筆と評価しておきたい。

『蝦夷島奇観』写本のなかには、サハリン島に関する場面として「山丹錦」、「熊牙取図」、「抜犬之陰嚢図」、「山靼人」、「唐太ホロコタンイコンランゲ」などを収録するものもあるが[16]、『アイヌ画譜』の八場面は東博本の八場面と完全に一致している。このことから、『アイヌ画譜』下巻と東博本は、同時期に檍丸の手により作製された副本（もしくは控え）・正本の関係にあると評価しておきたい。

まとめにかえて

本稿の「はじめに」でも述べたとおり、「アイヌ画譜」という名称は、所蔵館である北海道立図書館の受入登録名であり、上巻、下巻の二帖での整理も所蔵館の分類である。本稿で検討した結果、下巻とされるものは秦檍丸自筆かつ東博本『蝦夷島奇観』の「十二　唐太部」の写本である可能性がきわめて高い一方、上巻とされるものは檍丸の自筆とは断定できないものである。すなわち、上巻と下巻は両者とも『蝦夷島奇観』に関係しているとはいえ、成立背景の異なるものであり、それぞれが零本である。「アイヌ画譜」という名称、及び二冊を上下の完結本として扱うことの是非については、今後検討の余地があるだろう。

東博本（部分）
Image: TNM Image Archives

東博本（部分）
Image: TNM Image Archives

写真14　『アイヌ画譜』下巻と東博本「十二　唐太部」の絵の細部の比較

一方、道図本の『蝦夷島奇観』については、本稿では部分的に言及するにとどめたが、東博本の成立を探究するうえで無視できない資料であることが、本稿での考察により浮上してきた。今後、道図本の詳細な検討により、『アイヌ画譜』と道図本、あるいは東博本と道図本の関係性についても考究し、写本構造を解明していく必要がある。その点は今後の課題としたい。

また、北博本A・北博本Bと、『アイヌ画譜』・東博本・道図本の関係についても、本稿ではほとんど言及しなかったが、北博本A、北博本Bの成立は幕末期以降とされており（山際 二〇一二、二〇一三）、東博本の成立時期とは数十年以上の懸隔がある。例えば、〔熊祭挟殺図〕に注目すると、北博本A・Bともにクマを挟む木は三本描かれており、その点で北博本A・Bは、東博本よりは『アイヌ画譜』や道図本の描写に近いと言える（八～九頁写真参照）。こうした点は、北博本A・Bを含めた東博本以後の『蝦夷島奇観』写本が、東博本以外の作品から派生したことを窺わせる事例と言える。以上のような諸問題の検討も、今後の課題としたい。

付記

本稿は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）・基盤研究（C）「『蝦夷島奇観』成立史と写本構造に関する研究―「アイヌ文化成立」言説の探究―」（課題番号：23K00805、研究期間：令和五（二〇二三）～令和九（二〇二七）年度、研究代表者：東俊佑）による研究成果の一つである。

註

（1）北海道立図書館では、『アイヌ画譜　上』（請求記号210.088/A/1）、『アイヌ画譜　下』（請求記号210.088/A/2）としてそれぞれ登録・配架されている。それぞれの形態は一冊の折帖仕立てである。なお、資料表紙の題箋貼付部分は台紙のみで本紙はなく無記載であり、資料中のどこにも「アイヌ画譜」の記載は見当たらない。北海道立図書館によると、本資料は個人から購入したものであり、一九五一（昭和二六）年五月二五日に「アイヌ画譜」の名称で受入原簿に登録されている以上のことは不明とのことである。「アイヌ画譜」の名称は旧蔵者が付した名称と考えられる。また、二冊を「上」と「下」とし、完結本のように扱う理由も不明である（旧蔵者が上、下としていたか、北海道立図書館が表装の似ている二冊に対して受入時に上、下と付したかは不明）。本稿では、所蔵館の登録名称に倣い、上巻・下巻の二冊を合わせて、とりあえず『アイヌ画譜』と呼称する。

（2）秦檍丸（一七六〇～一八〇八）は、絵図の作製を主な生業とする幕府雇の役人である。役人としては「村上島之允」と名乗り、作製した多くの作品には「秦檍丸」と自署している。一七六〇（宝暦一〇）年に現在の三重県伊勢市で生まれた檍丸は、一七九八（寛政一〇）年に幕府の支配勘定・近藤重蔵の蝦夷地調査隊に絵図師・算者として随行して以降、幕府高官の巡視随行に駆り出され、蝦夷地図作製に奔走する。その過程で知り得たアイヌの実情を伝えるために制作したのが『蝦夷島奇観』である。秦檍丸や『蝦夷島奇観』の詳細については、谷澤尚一・佐々木利和編『秦檍麿自筆　蝦夷島奇観』（谷澤・佐々木 一九八二）を参照のこと。また、檍丸の作品については、北海道博物館第五回特別展「アイヌ語地名と北海道」においてその一部が展示された（特別展図録は北海道博物館編『アイヌ語地名と北海道』（北海道博物館 二〇一九））。

（3）北海道博物館は、『蝦夷島奇観』写本を三点所蔵する。①『蝦夷島奇観』（収蔵番号七一九二〇）、②『蝦夷島奇観』（収蔵番号一二六二四七）、③『蝦夷島奇観（近夷地雑図部）』（収蔵番号一二六二六五）の三点である。本稿では便宜上①を「北博本A」、②を「北博本B」と称す。なお①②については、すでに旧北海道開拓記念館の『研究紀要』において詳細な分析・紹介・評価が行われている（山際 二〇一二、二〇一三）。

（4）『松浦竹四郎研究会会誌』第三号の巻頭記事「史料をさがし求めて―谷澤尚一会員に聞く―」に「『蝦夷島奇観』の場合でも六十五種類チェックしているんですよ。それだけで十年はかかっているんです。ですから、それらを全部見たので自筆本は三種類しかないということが確認できたんですよ。矢張り見なければわからないですね。」（谷澤 一九八五：九）とあることから、檍丸の自筆本、写本を含め六十五件以上はあると想定できる。

（5）前掲（3）。

（6）いわゆるアットゥシ（樹皮衣）のことであるが、檍丸は『蝦夷島奇観』の詞書のなかで「木皮衣」と表現していることから、本稿ではこれに倣う。

（7）東博本では腰にマキリを提げている人物は三人（画面中央やや右下の魚を持つ人、

クマ檻の右で踊る白髪・白髭の老人、クマの正面で手を叩いている人物）なのに対し、『アイヌ画譜』では少なくとも八人は腰からマキリ、入れ物、タバコ入れを提げている。

(8) 東博本は「一　古説部」から「十二　唐太部」及び「附録　三邑図」を含め十三巻のなかに約一三〇の場面（場面の数え方は研究者により区々であろう。筆者は一三七場面で数えている。詳細は本誌七三～九二頁の拙稿を参照のこと）が収録され、その大部分の絵と詞書の筆致は一致している。東博本に収録される大部分の場面の筆蹟については、佐々木利和が指摘するとおり、檍丸の絶筆である『東蝦夷地名考』の筆蹟と同筆であり、檍丸の自筆と解釈される（谷澤・佐々木 一九八二：二三四）。このことに筆者は異論はない。ただし絵については、東博本に収録される大部分の場面の筆致が共通しており、東博本が同一人の手による作品であることは理解できるが、これが檍丸の自筆なのかどうかは正直なところ筆者には判断できない。したがって、佐々木の見解、あるいは東博本の序に「秦檍丸」と署名があることに疑念を挟まず、ここでは絵も詞書も檍丸の自筆として解釈しておきたい。

(9) 前掲（8）。

(10) 『大日本国東山道陸奥州駅路図』は函館市中央図書館などに所蔵されている。『東蝦夷地屏風』は函館市中央図書館所蔵。『東蝦夷地名考』は檍丸の自筆とされるものが函館市中央図書館、東京大学附属図書館、国立公文書館、北海道大学附属図書館に各一点ずつ計四点確認されている（高木 二〇〇五）。筆者は四点すべての檍丸による風景描写を実見したが、山の稜線や着色の相違などは、四点間のなかでも見られたため、『アイヌ画譜』と東博本の相違は「同一絵師が相似図を作製する僅差の範囲」と解釈した。

(11) 写真6上の『アイヌ画譜』の写真はデジタル一眼レフカメラにマイクロレンズを取り付けて筆者が撮影した写真であり、下の東博本の写真は、東京国立博物館所蔵のフィルムをスキャニングした画像である。拡大すると東博本の画像はややぼやけてしまうが、東博本も髪の毛は一本一本を丁寧に描いている。

(12) 北海学園大学（北駕文庫）所蔵の『蝦夷島奇観』のなかに「判官義経岬」を描いた場面があり、そこには「カラフト島東地の中に」とある。檍丸がサハリン島を踏査した歴史的事実は確認されておらず、「唐太部」に関する絵はすべて写生画ではないと考えられるので、どこかを描いた風景画に「判官岬図」との画題を付与した可能性は高いと言える。

(13) 近藤重蔵自筆の『辺要分界図考』の所在は不明なので写本による検討となるが、筆者が北海道大学附属図書館所蔵のものを調査した限りでは三件のうち二件にこの絵と画題がある。なお国書刊行会編『近藤正斎全集　第一』（国書刊行会 一九〇五：二八）収載の「辺要分界図考巻之三」にもこの絵と画題がある。

(14) サハリン島アイヌ有力者の葬制（ミイラ作り）については、海保嶺夫の研究がある（海保 一九七四：一四五―一六一）。

(15) 前掲（13）の北海道大学所蔵の写本の三件のうち一件に黒色系の着色がある。また国書刊行会本にも黒色系の着色がある。

(16) 筆者がこれまでに調査したところでは、国文学研究資料館所蔵本、函館市中央図書館所蔵本、北海学園大学（北駕文庫）所蔵本、国立公文書館所蔵本などにこれらの絵が収録されている。

参考文献

池田貴夫 二〇〇九．クマ祭り：文化観をめぐる社会情報学．第一書房．

海保嶺夫 一九七四．日本北方史の論理．雄山閣．

国書刊行会編 一九〇五．近藤正斎全集　第一．国書刊行会．

佐々木利和 二〇一三．アイヌ史の時代へ：余瀝抄．北海道大学出版会．

高木崇世芝 二〇〇五．『東蝦夷地屏風』と『東蝦夷地名考』．アイヌ語地名研究 八．

谷澤尚一・佐々木利和編 一九八二．秦檍麿自筆　蝦夷島奇観．雄峰社．

谷澤尚一 一九八五．史料をさがし求めて―谷澤尚一会員に聞く―．松浦竹四郎研究会会誌 三．

北海道博物館編 二〇一九．アイヌ語地名と北海道（第五回特別展図録）．北海道博物館．

山際晶子 二〇一二．北海道開拓記念館所蔵の『蝦夷島奇観』写本をめぐって―平沢屏山筆絵画との関係―．北海道開拓記念館研究紀要 四〇．

山際晶子 二〇一三．早坂文嶺筆『蝦夷島奇観』写本について．北海道開拓記念館研究紀要 四一．

NOTES AND SUGGESTIONS

Examination of *Ainu Gafu* in Hokkaido Prefectural Library Collection

AZUMA Shunsuke

This study examines the two volumes of *Ainu Gafu*, a pictorial material held in the Hokkaido Prefectural Library Collection, comparing its contents to *Ezogashima Kikan* authored by Hata Awakimaru (also known by the name of Murakami Shimanojo). It is thought that Awakimaru first established *Ezogashima Kikan* in 1799 as a collection of drawings based upon his travels in Ezochi, then later revised and supplemented his work multiple times until its final completion in 1807. The original work is designated as an Important Cultural Property of Japan, and is housed in the Tokyo National Museum collection. In this study, we examine each scene of the works, comparing elements such as drawing composition and brushwork, and script of the captions. We find that the first volume of *Ainu Gafu* corresponds to the sixth volume of *Ezogashima Kikan* (Kuma-matsuri, the bear festival) and that the second volume of Ainu Gafu corresponds to the twelfth volume of *Ezogashima Kikan* (Karafuto), revealing a high probability that the second volume was authored by Hata Awakimaru himself, and that the first volume was created before the establishment of *Ezogashima Kikan*.

AZUMA Shunsuke : History Studies Group, Research Division, Hokkaido Museum